

はくさん

第5巻 第3号



中宮部落獅子舞

9月15日、吉野谷村、鳥越村の各部落では秋祭りが、華やかに繰りひろげられます。丁度、稲の穫り入れ前後に、その年の豊作を神に感謝して行なわれるこの祭りでは、人々の神への感謝とまた1年の農事を無事終えることのできた喜びの気持ちを表わす、民俗芸能が多く行なわれます。鳥越村三ツ屋部落で行なわれる、ニワカは、ハラメ女のおカメとヒョットコの間での軽妙なカマケワザを中心に人々を喜ばせますし、また多くの部落で行なわれる獅子舞も、秋祭りには欠かせぬ民俗芸能の一つです。

吉野谷村中宮部落でも、昨年の秋祭りに5年振りで獅子舞が行なわれました。費用不足と人手不足で、久しく出せなかったものを、壮青年団を中心に村人が一丸となって復活したものです。軽快な道行きの囃子によって稲刈り前の農道を練り歩く獅子舞行列の後を、老若男女の村人たちは、いつまでも、名残り惜しそうに続いていました。 (高桑 守)

自然観察会へのいざない

上馬 康 生

近年、都市周辺では宅地開発や工場誘地、それに伴う道路建設などにより田園風景や雑木林など昔の面影がどんどんなくなっています。そのため昔の子供なら毎日のように接していた身近な自然、鬼ごっこやかくれんぼをした林、魚とりをした小川、木イチゴを摘んだ崖っぷちなどが少なくなり、そんなところで遊べなくなりました。昔はそのようにして自然の中のいろいろなものを知り、また仲間同士の連帯意識のめげえなどがあったのでしよう。

ヒトも動物界の一員です。鉄やコンクリート、プラスチックに囲まれた都市の中では、動物としての健全な成長はできません。最近の子供は豊富な図書やテレビなど自然に関する多くの情報を得る機会があり、知識としてはたくさんもっています。植物や動物の個々

の名前や言葉としての自然保護は知っています。しかし自然の中に実際にある生きた自然を知りません。名前のら列ができるだけで相互のつながりを知りません。自然界では土や水、そこにすむ植物や動物の1つ1つがばらばらにあるのではなく、それらが1つの大きなまとまり（生態系）の中で、それぞれあるきまった位置を占め、働きをもって存在しているのです。そしてヒトも動物の一員である以上位置や働きがあります。決して自然界のルールに逆らうことはできません。たとえ一時的に支配者になったつもりになれたとしても。

自然を保護するということは要するに自然界のルール、まとまりのある自然のしくみを壊さないということでしょう。私たちヒトもその一員であり、そこからいろいろなものを

昭和 52 年度自然観察会一覧

名 称	テ ー マ	場 所・日 時	内 容・参加者数
春の自然観察会	春を迎えた近郊の自然	鶴来町獅子吼高原山麓 4月17日	植物、鳥の観察による自然への接し方を学ぶ。 17家族45名
親と子の自然観察会（環境週間協賛行事）	白山麓の自然と人々の暮らし	尾口村白抜山周辺 6月5日～6日	初夏の植物、鳥の観察とダム見学により自然と人々の暮らしのかかわりについて学ぶ。23家族74名
夏の自然観察会	白山火山とクロユリを訪ねて	白山頂上部 8月4日～6日	火山地形、高山植物の観察と登山マナーについて学ぶ。31名
秋の自然観察会	化石でさぐる白山のおいたち	白峰村桑島 11月5日～6日	化石標本により昔の自然界のつくりをふりかえり、実際に現地採集をする。15家族43名
冬の自然観察会（予定）	雪原にけもの生活をさぐる	尾口村瀬戸野 2月4日～5日	雪深い山里の雪上に残された足跡から動物の生活をさぐる。
〈備考〉 関連他機関の行事 白山ろく少年自然の家 春の山に親しむつどい（5月） 秋の山に親しむつどい（9月） 冬に山に親しむつどい（2月） 白山青年の家 郷土愛護セミナー（6月） 白山フェスティバル（7月）			



高山植物の観察

取り入れて生きています。私たちを支えてくれるその自然がいつまでも健全なままであるように、その範囲内で開発をし、残すべきところは守っていかねばなりません。自然保護という思想は言葉だけの知識では役に立ちません。子供のころから自然に親しむことにより身についた知識となっていなければだめです。自然の中で遊び、いろいろなものに接し、子供たちはその好奇心の旺盛なことから多くのことを学んでいきます。教師や親に自然保護に対する考え方があり、適切な指導があるなら、やがて自然を守っていかねばならないことがわかっていくでしょう。

当センターでは、自然保護教育の一環として白山地域における自然観察会を催しています。これは実際に自然の中へ出向き、生きた自然の中で、そのしくみやそこでの生き物の活動のようすを観察し、互いのつながりを理解した上で自然に接するルールを知ってもらうことをめざしています。観察会には中宮のセンターの自然観察園を利用して行っているものと、白山地域の方々へ出かけて行って行っているものがあります。

自然観察園ではセンターの展示室からジライ谷の野猿広場までの林の中、片道約30分の道沿いに行っています。まず展示室で自然解説パネルや標本などにより、自然のしくみの概略を見ていただきます。そして観察路を歩きながら、オニグルミ林ではそこにどのようないきさつで林ができたのか、昔はどのような人々の生活があったのかを学びます。また

ブナ林では木々がどのように棲み分け合っているのか、樹幹や葉にどんな虫がおり、鳥はどこで囀っているのか、また林下の落葉の中はどうなっているのか、そしてこれら生き物がブナ林の中でどのようなつながりをもって生活しているのかを考えてもらいます。そして野猿広場ではサルの社会の構成を知り、ボスザルの働き、見張りザルのいる場所、そして母ザルや子ザルの行動などを観察し、個々ばらばらに見えながらも全体として規律ある集団となっているようすを学びます。

次に観察園以外で開催している自然観察会は表に示したように白山の山ろくや頂上部において年4～5回あります。これは1泊2日ないし2泊3日の行程で、原則として父兄同伴の小中学生を対象に行っているものです。

昨年6月には石川県立白山ろく少年自然の家との共催で、尾口村東二口地区から白抜山に至る登山路沿いに観察会を開きました。テーマは白山ろくの自然と人々のくらしで、自然の中での植物や鳥の観察のしかたや、手取ダムと周辺の人々のくらしとのかかわりについて学ぶことが目的でした。前夜、スライドや映画を使い、現地での観察の予備知識となるようなレクチャーをしました。当日はセンターと少年自然の家の職員が引率して、要所所で植物や鳥の説明をしながら白抜山に向いました。スギ林の下にジャガの花が咲き、かん木のしげみからヤブサメの音が伝わってきたり、草原にホオジロが囀り合っていました。また沢筋にはミズバショウの白い花も



白山火山柱状節理の観察

残っていました。そして林道から見おろした手取ダムの建設現場には、マッチ箱のような超大型ダンプやショベルカーが動いており、その規模の大きさに子供たちは目を見張っていました。

夏休みには白山の頂上部で、白山火山とクロユリをたずねてというテーマのもとに観察会を行いました。初日は少年自然の家に泊り、白山火山の成り立ちの話や高山植物の学習会を聞き、また登山の心がまえや自然観察のマナーについて勉強しました。2日目は貸切バスで登山口の別当出合まで行き、高山植物を見たり、白山火山の柱状節理の説明を聞きながら登りました。途中、雨が強く小屋に避難したりしましたが、親も子も互いに励まし合いながら元気に南龍ヶ馬場の山荘に着きました。3日目は展望コースから室堂に向い、元気な人はさらに頂上まで登りました。高山植物がちょうど見ごろの時期で、クロユリやハクサンフウロ、コバイケイソウなど色とりどりに咲き、ハイマツの枝先にはカヤクグリが囀り、上空をアマツバメが飛んでいました。小学校低学年の参加者も多くいましたがみんな元気いっぱい、親子で夏の一日を楽しく過ごすことができましたと思います。

今までに行った観察会には、これらと違った内容をもつものとして、出作り小屋の観察をとおして昔の山村の生活をふり返してみたり、ドングリなどの木の実の細工や草花のスケッチなどをしたこともあります。

何度か開いてきた自然観察会ですが、問題点もいくつか出てきました。その1つは参加



出作り小屋観察



化石採集

人数についてです。多人数を引率した場合、全員に説明がゆきとどかないことがあります。特にセンターの自然観察園での場合、1本道であることと人数の制限のないこともあって、後方の人までなかなか説明がいき届きません。また指導できる職員の数とその内容も限られているので、来館者の多い7～8月は金沢大学自然保護研究会のメンバーなど外部からの応援をうけたりしています。センター以外のところへ出かけて行く場合は、40名くらいを定員とせざるを得ないのが現状です。また、自然観察のやり方自体にも問題があります。それは耳から聞くだけではなかなか本物の自然観は養えないということです。だからといってむやみに採って自然を害ね、生命を奪うようなことは差し控えなければなりません。またセンターのある場所が白山の山の中で交通など不便なこと、そして活動がどうしても山に片寄りがちになることです。何も山奥の珍しい自然だけを見るのが自然観察ではないのです。私たちが日常生活している町の中の小さな庭先や公園にもりっぱな観察の場があります。そのような身近なところの自然観察にも関心を向ける機会づくりが必要でしょう。

いろいろ問題点はありますが、観察会を重ねるなかで、実り多きものにするにはどうすればいいかを考えながら今後の自然観察会を行っていきます。多くの方々が参加していただけますように。

〈研究普及課〉

ライチョウの移殖をめぐる生態学的諸問題

5. まとめにかえて

花井 正光

捕獲と天敵

ライチョウが白山から姿を消した原因を探ろうとして、私は、地理的条件と個体数の年次変動が大きくて不安定なライチョウ個体群の特徴を考えてきました。この推理を証明することは今のところ困難ですが、かなりまともなものではないかとちょっぴり自信をもっています。

ところが、動物の絶滅が話題になるとき、多くの場合ヒトとのかかわりが問題にされてきましたし、食う-食われるの関係(天敵)が注目されたりします。ある地域からある種の動物を捕りつくしてしまう場合がヒトによる絶滅原因の最たる例でしょう。また、天敵が餌動物を食べつくしてしまうことが後者の場合です。ヒトのかかわり方としては、各種の開発行為により餌や棲みかを無くして動物が生息できなくなるような間接的な型のものもあります。どちらかと言えば、捕獲(または捕殺)のような直接的な場合より、生息環境の変化によるこの原因の方が作用するケースが多いようです。

いずれにしても、白山のライチョウに関してもこの種の絶滅原因が幾人かの人の関心事であったようですから、これらの点についての私の調査結果や考えを述べておこうと思います。ヒトによるライチョウの捕獲が白山であったかどうかを調べるには文献によるか、山麓に住んで白山と係わりをもってきた古老の話聞かせてもらうなどの方法があります。ライチョウの移殖問題がもたらされた後、

この点について私たちがおこなった調査結果を要約しておきます。詳しくはセンターの研究報告書第3集をどうぞ。ライチョウが登山者によって捕獲されていたことをうかがわせる文献は江戸時代後期や明治時代に2, 3見ることができます。しかし、白山信仰が今よりずっと盛んだった当時、ライチョウは霊鳥として神聖視されていたことも事実なので、そう度重なる捕獲はなかったと思ってよいでしょう。80才を越える古老の話でも捕獲の例を聞くことはありませんでした。また、ライチョウの剥製標本が県内で17体所蔵されていることが、金沢女子専門学校の徳本洋さんの手で明らかにされたのですが、この内で白山産であることがはっきりしているのは1例(写真5-1)だけでした。日本で唯一の鳥の研究所である東京の山階鳥類研究所を訪ねてみましたが、産地のはっきりしている剥製56標本中にも白山のライチョウは見ることができませんでした。

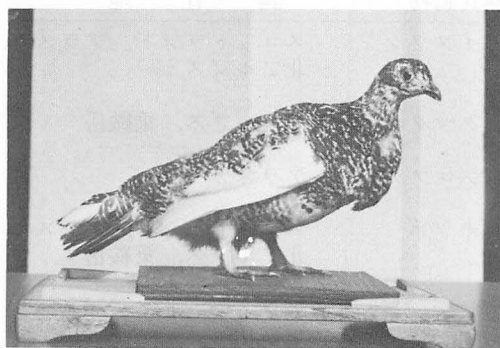


写真5-1 石川県下に所蔵されているライチョウ剥製標本17体中ただ1体の白山産の剥製

以上の事実から、私には、白山でのライチョウ捕獲が、個体群を絶滅に導くほど強度におこなわれとは考えられません。

次に天敵の問題です。ライチョウの捕食者としてこれまでに報告されている動物のうち主なものを表5-1にまとめておきました。種名の左に○印の付けてある捕食者は白山にも生息している動物です。フクロウ類を除いた捕食者が白山にも共通して分布していることがわかります。しかしながら図5-2を見てください。オコジョのライチョウ捕食（この場合は卵ですが）についての研究から引用したものです。ライチョウの卵の多少に応じて、しかも後を追うようにして捕食が起っているのを見ることができます。年をおって繋いでゆくと、ちょうど時計と逆方向に回っています。捕食者と被捕食者との関係は普通こんな具合で、捕食者が餌を食べつくしてしまうような現象はまず生じえないと考えてよいのです。あくまでも餌動物の多さに依存して捕食しているからです。ただし、この法則にも例外はもちろんあります。それは長い時間をかけて食うもの食われるものが創りだした自然状態でのバランスですから、新しく侵入してきた捕食動物による餌動物の捕食や、餌動物

表5-1 各地における主なライチョウ捕食動物の報告例と白山に生息分布する動物（○印）

捕食動物	調査地
○イヌワシ	スコットランド、アラスカ 北アルプス
○クマタカ	北アルプス、乗鞍岳
シロフクロウ	アラスカ
○キツネ	スコットランド、アラスカ 北アルプス、乗鞍岳
○テン	アラスカ、北アルプス 乗鞍岳
○オコジョ	アラスカ、北アルプス 乗鞍岳

の生息環境が変化してしまう場合では話は違ってきます。

捕獲や天敵とある種の動物の関係はその環境も含めて複雑なものですから、とても上記のように簡単には片付けられない問題だとは思いますが、白山のライチョウ絶滅を考えるには一応これらの要因は除去しておいてよいというのが私のおおまかな結論です。

気候変動（小氷期に関連して）

気象が動物の生活を大きく左右することは明らかですし、分布上の制約要因となっていることにも異論の入る余地はないでしょう。ライチョウが氷河時代の遺存種として本州中部の高山帯にのみ分布していること自体、気象条件を抜きにして考えることはできません。気温や雨量、降雪量などの気候因子は、生物の生活そのものを左右すると同時に生活環境の変化を通じて二次的に影響をおよぼし

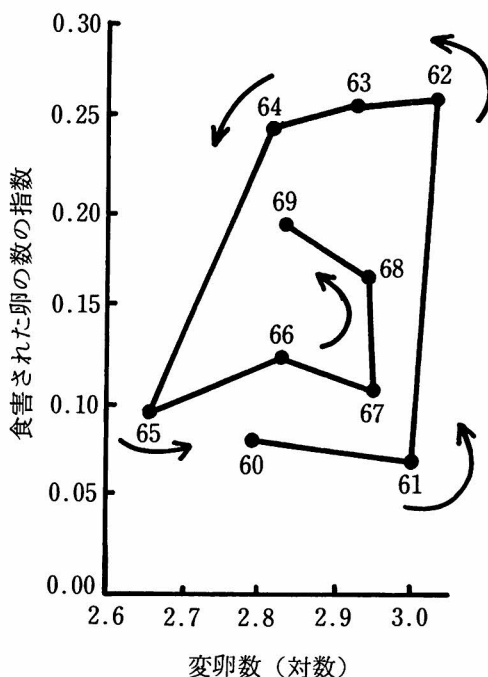


図5-2 ライチョウの産卵数とオコジョによる食害の関係。アラスカでの調査結果（1960年～69年）。解説は本文参照。矢印は筆者。（デンプスター1975年を描き直す）

ます。生物が気象の作用を受ける場合には、おそらくこうした直接、間接的な受け方を同時にしているはずです。

ところで、白山のライチョウ絶滅の一要因として私が想定する気象変動は、異常気象のような短期的な現象でなく、10年、20年あるいは50年以上にも及んで継続する長期的な現象です。最近になって氷河時代の再来が多方面で熱い論議を呼びおこしていることにお気づきでしょうか。私も、生物とその環境についての科学すなわち生態学を学ぶ者として、この問題には関心を持たざるを得ませんでした。わずかずつですが関係の書物を読むうちに、小氷河期と呼ばれる時代が繰り返えし訪れてきた事実を知らされました。一番最近では、18世紀後半から19世紀前半にかけて、つまり江戸時代後期の約100年間で現在よりも2~3°C平均気温が低い小氷期であったそうです。天明から天保へかけて飢饉が続発した時代と言いかえた方が理解しやすいかもしれません。私にはこの2~3°Cの気温低下がライチョウの生息域拡大による種の繁栄をもたらしていたのではないかと想像されるのです。そして、さらに小氷期からの回復につれて次第に生息適地を狭ばめられ、現在の分布域に限られるに至ったものと想像をたくましくするのは。だとすれば、白山のようにこれまでに述べた地理的条件にある山岳では、ライチョウの生息分布と絶滅が周期的に繰り返えされてもよいのではないかと思われるのです。この問題についてはもう少し詳しく検討を加えないと屁理屈ともとられかねないので心配ですが、ここでは一応問題の提起だけに留めたいと思います。もっとも、肝心のライチョウについての知見が殆んど得られていないので、そこまで精一杯といった感が強いのですが。

今後の課題

白山へライチョウを移殖する計画が環境庁から発表されてから2年余りを経てしまいました。移殖のための基礎調査がこの間進められたわけですが、調査員としてこのプロジェクトに参加しながら私の考えてきたことを、5回にわたって書いてきたのでした。ライチョウが白山から姿を消した謎を、主として動物生態学の立場から解釈してきたわけです。私自身は哺乳類を研究の対象にしているので、鳥に関しては素人ですが、自分なりに勉強したつもりでいます。ただ、日本におけるライチョウの研究が海外に較べて著しく遅れており、どうしてもニホンライチョウだけでは話を進めることができなかつたのは残念です。

ライチョウが生息分布している中部山岳では、登山者の増加につれて自然環境が悪化の一途をたどっているのは確かです。だからこそある時点では移殖といったはなはだ人工的な技術が必要であることを感じます。ただし、その際にも、現時点での自然環境保全対策が一方で十分に取組まれねばならないこと、個体群の変動といった長期におよぶが欠くことのできない基礎的な研究に裏付けされた管理技術がなければならないこと、この2点が是非とも満たされるべきであることは言うまでもないことです。ライチョウでは、これらの条件が全て急を要する今後の課題だと言えましょう。

白山におけるライチョウ絶滅についての私の謎解きを最後にまとめておかねばなりませんでした。許されたスペースがもうありません。白山の地理的な位置とその大きさが、ライチョウにとって十分ではなかつたというのが一応の私の結論です。5回にわたる連載をもう一度読み返して検討いただければ幸いです。

〈研究普及課〉

加賀の鶴来と美濃の剣の交流の始まり

石野春夫

岐阜県にツルギというところがあることが判ったのは電気の統合が行われた時で、たしか昭和17年の春もまだ浅い頃だったと思う。

大東亜戦争が始まってから国家総動員法が出来て、この法律によって電気でも銀行でも1つの県に1つの会社しか認められないことになって、町が持っていた電気事業も北陸電力へ統合されることになった。町としてはデカイ損になるが国策だから仕方がなかった。統合のための事務折衝には何べんも名古屋へ行った。名古屋には通産省の機関で名古屋電気庁というのがあって、ここで中部地方の町や村が持っている電気の統合の話が進められておった。

はじめて名古屋の電気庁へ行った時、若い2人の職員が応待に出たが、この2人は最後迄わしとの折衝を担当してくれた。

この2人の中の1人が歴史や地理が好きだったらしく、わしと話をしているうちに「鶴来」とは珍しい目出度い名前ですね」と聞いたので「昔は剣と書いたこともあったが病気が流行ったり、大火事があったりしたときに鶴来と書くようになった。剣に戻したときもあったがコレラが流行ったときに鶴来と改めて現在に至っているんだ」と話をしておった。

その時はそのままで終わったが2回目だったか3回目だったかはっきりしないが、この職員が「珍しい話を聞いた。貴方の所の分村だと言う人が居る」と言うので「わしの町に分村があると言うことは聞いたことが無いが」と話しをしておった。そのときだったか、その次に行ったときだったかはっきりしない

が、その職員の紹介で山下村長と合うことになった。当時、岐阜県の弥富村にも堂の発電所と同じ程の村営の電気があって、今の大和村の山下村長の父親の山下村長がわしと同じように統合のことで何回も来ておっらしい。

山下村長と会って話を聞いたら昔、和銅年間に加賀のツルギ村から来て村を作った者がおり、その子孫は今でも残っているとゆうことだった。そんな記録が金剣宮コンケングウに残っているとゆう話をしてくれた。山下村長の言うのには千年以上も昔の話だし、単なる昔話で、加賀にツルギとゆうところがあるとゆうことは村の者は誰も知らなんだ。貴方の町は私の村の母屋おもやになる町だ、母屋が判ったと言って喜んでおった。

このあとで山下村長からくわしいいきさつを書いた手紙をいただいて、ぜひ一度遊びに来てくれとさそわれていたが、町長在任中は忙しくて行けなかった。あの手紙は町の宝にと思って大切にしておいたが、武閑雲が貸してくれと言って持って行ったきり返して来なかった。あれも死んでからだいたいぶたつが、どうなったものやら探し出してほしいと思っておる。

山下村長の話によると、どうも金剣宮の神主をしておった者らしい門とか加藤とか言う者が戦乱のため加賀では食えなくなったらしい。それで金剣宮の御神体を持って、白山を越えて美濃の国へ行って住みついたものらしい。

戦争がすんで、何年かしてから山下村長に

祭りに来いときそわれて行ったことがあるが、そのときは村をあげて大歓迎してくれた。モチまきをすると言うので見たら4斗桶に2はいもモチが用意されておる。屋根へ上ってまけと言うのでお宮の屋根へ上ったら「母屋もんやの加賀の鶴来から来た元町長だ」と紹介されたので集っておった村の人達は大喜びだった。

行ってみて判ったことだがむこうの言葉が白峰の言葉に大へんよく似ておる。白峰に加藤とゆう名前が多いがこれとも何か関係があったのかも知れないと思っておる。とにかく加賀の鶴来の者が白山を越えて行ったのは間違いないことだろうと思っておる。

近年交流が盛んになったのはよいことだ

し、今後も交流を続けて行ってほしいと思っておる。(話 元鶴来町長 酒井甚一郎氏)

岐阜県郡上郡大和村字剣の金剣神社の由緒書には次のように書かれています。

元明天皇の御宇和銅年中、加賀国剣村より美濃国剣村へ門、総左衛門、加藤興三右衛門と云ふ者引越其頃一村拾六戸にて金剣神社一字を創立す。元正天皇の御宇養老年中に泰澄白山に登りし時、金剣神社忍穂耳尊、瓊々杵尊を奉祀す。延寶3年三社共焼失同8年4月21日金剣神社一字を再建すと言ふ。泰澄手跡の立石並に手植の柏木今尚存在せり

〈資料提供、大和村教育委員会〉



(イラスト 石川太郎)

立山をたずねて

小松原 隆之

山裾で秋の気配を感じ初める9月も終わりに近い頃、頂付近はもう全山燃えるような紅葉の真っ盛りである。自然は天才画家のように思い思いに色を変え、限りない色彩のハーモニーを見せてくれる。

そんな時期に、山岳地域を持った他の国立公園での自然保護・清掃活動など白山での諸問題について、どう対処・管理しているのだろうかということで、隣県である富山県の立山自然保護センターを訪ねてみた。中部山岳国立公園管理員の上谷氏と富山県職員の佐伯氏の案内で、アルペンルート沿線・立山山頂と観光地点を回ってみた。

そこで驚いたことは、室堂平が白山の室堂平と同じぐらいの高さでありながら全くその高さを感じさせないことである。周辺を見渡せばホテルが建ち、バスが駐車し、背広姿の観光客が雑踏している。およそ白山では予想もされない光景が目映る。一步一步汗を流しながら登る山と何の苦労もなくバスが運んでくれる山とでは、山頂での感激は勿論ちがうが、人間の錯覚のためか標高や気候まで変わってくるような気がする。それだけに悪天候の場合、利用者にどう対処しているのかはよくわからないが、観光客が山を甘く見る傾向があるのではないだろうか。幾等2400m付近まで車両が上がって、ハイキングコースのような登山道だと言っても、標高や気候はうそを吐かないだろう。ふとそんなことを思った。

その日は立山山頂雄山を目指した。室堂平から山頂を見ると手の届くような所にあっても、いざ登ってみると以外に時間が掛かる。一の越まではハイキングコースのような登山道で、整備過剰の面もあり、登山者にとっては本当に高山に来た気がしないことだろう。むしろ、登山者にとって室堂平・一の越近辺は入山するための基地に過ぎず、ここを出発して剣・薬師岳方面へ向かう。白山では言わば市ノ瀬・別当合に相当するような感じである。そのため、白山のようにブナ林の中を歩く登山というのはこの付近では出来ない。対照的に一の越から立山までは岩が露出して非常に歩きにくい。山頂からは北アルプス全山が遠望できる筈であったが、悪天候のため見ることが出来なかった。

自然保護センターに着いた時は霧も晴れ夕焼けが紅葉の立山を染めて、しばし我を忘れて大自然のドラマに浸っていた。センター館内には国立公園管理事務所を初め、富山営林署、山岳警備隊などの事務所があって、関係行政機関の合同庁舎と考えてよい。またここはナチュラルリストの基地でもあって、展示室、レクチャールームなどを設置して利用者に自然解説や登山指導なども行なっている。これがここの特徴であり、白山自然保護センターと異なるところだろう。

どこの山でも問題になるのはゴミ処理だが、ここも例外ではない。管理員の話によると立山でのゴミ持ち帰り運動は、アルペンルート利用者がほとんど観光客であるため、効果があまりないということであって、登山者の8割が運動に協力した白山とではあまりにも対照的であるといえる。これは利用者数のちがいがもさることながら、利用者の質のちがいによるところが最も大き

い。重いリュックを担いで登る登山者と何の苦勞もしないで岩に立てる観光客とでは、おのずから自然保護に対する考え方もちがってくるのだろうか。

次の日はアルペンルート最深部である黒部ダムへ向かった。立山トンネルを出ると、後立山連峰が眼前に迫ってくるように見えた。昨日とうって変わってこの日は快晴。ちょうど土曜日と重なり、黒部ダム付近は大変なにぎわい方だった。ここを利用する観光客は年間で70~80万人に上るが、その大半は日帰りだそうだ。白山と比較すると何と約20倍強で、観光客にとってはいかに魅力地であるかがわかるだろう。しかし、これだけの観光客を吸収する立山で自然破壊が進むのは当然であり、今や登山者が目指す山ではなくなった。白山のよさは何と言っても観光開発の波が押し寄せてなく、登山者が少ないということだろう。人間が足を踏み入れた自然、手を付けた自然というのは、例え自然が破壊されなくてもそれ自体で価値がなくなってしまうのではないだろうか。白山は独立峰なので山容が小さく、連峰で山容の大きい立山のような観光開発をすれば、白山はひとたまりもないだろう。

黒部ダムで引き返し室堂平へ戻ったが、途中の駅は凡て混雑して、室堂に着いた時はもう昼近くだった。最後に室堂平のミクリガ池周遊道を回って立山を後にした。

今回の視察の目的は、白山と立山の比較ということであったが、凡ての面でちがいが歴然としていることを痛感した。利用者の層が登山者と観光客であるというちがいは、観光開発におけるいろいろな条件によるちがいであり、さらには、観光開発がなされた時期によるちがいである。ようするに、白山は観光地としての魅力には非常に欠けており、利用者数も、スーパー林道が開通したとは言えまだまだ少ない。しかし、極めて原始性の高い国立公園としての一つの姿勢を持つ白山だけに、観光の開発は逆にマイナスになるのではないかと思う。

観光開発と自然保護のかねあいというものは非常に難しい。その意味では、立山と白山は対照的なモデルであると思う。しかし、昔から3名山の中に詠まれ、信仰の山として人々から親まれて来たという共通点はこれからも続いて行くだろう。

〈自然保護課〉



立山自然保護センター



黒部平園地

たより

夏から秋にかけてにぎやかだった中宮の当センターも、降り積もる雪に埋まっていることでしょう。今は山を降り、吉野谷村市原にある冬期事務所で仕事をしています。野外での活動も夏期ほど多くなく、みなさんとの接触の機会も少ないですが、2月の上旬には冬の自然観察会を前記のように行い、下旬には自然保護シンポジウムを開く予定です。

シンポジウムは、白山地域の振興と自然環境の保全についての在り方を考えようとするもので、山村問題の研究者と地元の青年団団長の講演をもとに、参加者全員で自由討議をしたいと考えております。下記の要項で行いますので、おさそい合せの上多数ご参加下さるようお願いしています。

テーマ 山村の未来づくり—白山地域—

日時 昭和53年2月22日、午後1時～5時

場所 尾口村役場ホール

講師

足立省三（中日新聞論説委員）"新しい山村づくりと白山山麓地域の展望"

伊藤喜栄（金沢大学法文学部助教授）"地域開発政策の展開と農山村対策"

宮下定男（白山麓連合青年団団長）"白山麓の観光開発の未来像"

目次

中宮部落獅子舞	高桑 守	1
自然観察会へのいざない	上馬 康生	2
ライチョウの移殖をめぐる生態学的諸問題（5）	花井 正光	5
白山の民話(9) 加賀の鶴来と美濃の剣の交流の始まり	石野 春夫	8
山日記	小松原 隆之	10

はくさん 第5巻 第3号

発行日 1978年1月20日
発行所 石川県白山自然保護センター
石川県吉野谷村市原
印刷所 株式会社 橋本 確文堂